■ フォト・エッセイ ■

メーデーの風
―― サンティアゴ・デ・クーバのメーデー ――

写真・文
坂倉　恒
Hisashi Sakakura

メーデー前日の子供たちのパレード

二〇〇八年四月末日。キューバ第二の都市、サンティアゴ・デ・クーバに到着した。とても坂の多い街だ。歩き回ると幾つもの山を削って建てた街だというのが良く分かる。シエラ・マエストラがそびえ立っているため年中暖かい。首都ハバナが寒くなった季節でもこの街だけは暑い。黒人の比率が高くハバナに比べ情熱的である。コロンブスに最初に発見されたのが、このサンティアゴ・デ・クーバだった。ここから西へと開拓されていった歴史があり、ハバナへの対抗意識が今も残っている。文化や流行の最先端はこちら、という自負が住人にはある。だからメーデーのフィエスタも、キューバで一番派手だと聞いていた。議長がラウルに変わった最初のメーデー。人々は一体どういう一日を過ごすのだろう。キューバで最も情熱的な人々の日常に触れてみたい。これがメーデーの数日前からこの街を歩き回ることに決めた理由だった。

キューバの歴史は世界の趨勢に翻弄された歴史でもある。一四九二年にコロンブスに発見され、そこからスペインによる植民地化支配が始まる。スペインから持ち込まれた疫病や過酷な労働により先住民は殆どいなくなった。代わりの労働力としてアフリカ各地から様々な種族の黒人が連れてこられた。サトウキビ生産など過酷な重労働を強いられ、多くの黒人が命を落とした。そんな厳しい環境の中でも、黒人は信仰や風習・風俗を守り続けてきた。一九世紀後

カメラを向けると、笑顔を振りまいてくれる

古書店で演奏をする人々

バイクでメーデーに参加した男性

半には世界的規模で奴隷制度廃止が広がり、奴隷解放の波はキューバにも押し寄せた。さらにキューバに愛着を持つキューバ生まれのスペイン人入植者が増え、スペイン王朝からの厳しい要求に反発を覚えるようになり、独立への機運が高まっていく。一八六八年、弁護士のセスペデスらが独立戦争を起こし、その意志はホセ・マルティらに引き継がれ、一八九八年アメリカの介入もありスペインに勝利。一九〇二年にキューバ共和国を樹立。独立後、クーデターなど不安定な情勢が続くが、アメリカ支援の下、バティスタが政権を奪還し独裁政治を開始。アメリカの強い干渉下にあり、富や経済をバティスタとアメリカ、米国企業、マフィアが握ってしまう。「米国の裏庭」と呼ばれ半植民地化しカジノが乱立し、マフィアや売春の温床となった。そんな母国を救おうと、フィデル・カストロ率いる一二人の若者が、サンティアゴ・デ・クーバにあるモンカダ兵営を襲撃した。一九五三年七月二六日のことである。だが事前に情報が漏れ襲撃に失敗。多くの仲間が殺されカストロも捕虜になった。恩赦で出獄し亡命先でチェ・ゲバラと出会い、再び革命軍を指揮することになる。いわば、この地から革命が始まったのだ。

革命後もアメリカとの関係悪化、ソ連との接近、キューバ危機、経済制裁など、様々な困難を乗り越えてきた。一九九三年にはドル所持が解禁され状況が一変。現在は「特

メーデー後のフィエスタ。誰もが酔っぱらい陽気に踊る

PHOTO ESSAY

キューバ/Cuba

カフェのウェイターとウェイトレス

陽気に踊りまくるおばさん

別期間」と呼ばれ自由経済へとゆるやかに移行し始めている。観光立国を目指し街が整備された。旅行者はドルの代わりに兌換ペソを使う。日本円からの両替も比較的楽になった。大都市では警官が二四時間常駐し治安が良く、深夜に一人で出歩かない限りそれほど身の危険を感じることはない。

メーデー前日、市街を歩くと街のあちこちで「VIVA 1de MAYO」と書かれた横断幕を発見。紙で作られた小さな国旗が、街中至る所に飾ってある。中心街の公園では、子供たちのパレードが開催されていた。かつての革命戦士の衣裳や白衣などに変装した幼稚園児たち。絵や写真、スローガンを書いたボードを持ってる小学生たち。一番最後尾でビニール製の容器などを叩いて音楽を奏でている中学生たち。練習した言葉をリズムに合わせて歌いながら歩いていく。カメラを向けると、こちらに向かって笑顔を振りまいてくれる。

街の人たちも、子供たちのパレードを微笑みながら見守っている。公園から学校まで一キロほどのパレードだった。別の公園では、おばさんたちがメーデーの出し物の練習をしていた。踊ったりゲームしたり何やら忙しそう。街ぐるみでメーデーというお祭りを楽しもうとしてるのが感じられる。

メーデー当日、早朝五時に物音で目を覚ます。すでにフィエスタが始まっていた。テレビを付けるとハバナの革命広場には大観衆が集まり、ラウルが演説を行っていた。

キューバ音楽を演奏する人々

フィエスタで豚肉を売る露天主

子供たちのパレードを見守る人々

七時過ぎに外に出ると、広場での大規模集会はすでに終わっていた。広場からそれぞれの集落までパレードしているところだ。それぞれの集団が音楽をかけながら、踊り、歌い、フィエスタを楽しんでいる。午前一〇時頃になると中心街はガラガラになり、ちょっと離れた郊外にパレードが移動していく。そこには移動遊園地が設置され、大規模な露天が連なり、老人から子どもまで誰もがスピーカーから流れる音楽に合わせ踊り続けてる。ハバナクラブやラム酒をストレートで飲んで、歌って、踊ってる。「チェは英雄だ」、「そしてフィデルも」、「今は問題が山積みだが何とか乗り越えていくよ」カメラを向けると、人々は踊りながら笑顔で話してくれる。ここはキューバ、あらゆる人種とあらゆる文化が融合された国。波乱に満ちた歴史をものともせず生き抜いてきた。人々は陽気に、今を愉しんでいる。

ゆるやかな資本主義へと移行途中のキューバ。いろいろ問題も多いし不満もあるが、それでも以前よりはマシだと考えてる人が多い。果たしてこの国はこの先どこへ向かうのか。ドルを手に入れられる人々とそうでない人々の間で、所得格差が広がっている。この問題をどう解決するのか。キューバの掲げた理想と現実。そこが分かれ目でもある。だがその陽気さと音楽と情熱によって乗り越えていくのだろう。とても楽しみだ。

（さかくら　ひさし／写真作家）